

子どもの歌の歌唱表現の方法についての一考察

—保育者を目指す学生の視点に着目して—

河合 玲子

A Study on the Method of Expression in Singing of Children's Songs —Focusing on the Perspective of Students Aiming to Become Early Childhood Care Givers or Educators—

Reiko KAWAI

抄 録

平成30年度より施行された『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の領域「表現」の内容で示されたように、子どもが歌を歌ったり、歌を楽しんだりして、音楽に親しみ、その楽しさを味わえるように、保育者が音的環境や配慮を行って、子どもを支援・援助、また指導をすることは、とても大切なことである。保育者の養成校における学生指導についても、これらのことを念頭に、学生が、主体的で、深い学びが行えるように、授業を展開していかなければならない。

本研究の目的は、子どもの歌の歌唱に関するアセスメントシートの活用により、保育者を目指す学生の子どもの歌の歌唱の視点から、領域「表現」に鑑み、学生の注目点や課題点を探り、それを明らかにすることで、今後の授業展開における改善の要点を図るものとする。

キーワード：子どもの歌、領域「表現」、領域「環境」、領域「言葉」、主体的な学び

1. はじめに

幼児教育・保育における子どもの歌の重要性については、我が国に音楽教育が導入された黎明期より認知され、伊澤修二らにより音楽取調掛（明治14年7月）が設置、同年の11月には『小学唱歌集』、明治20年12月には文部省『幼稚園唱歌集』が刊行された。その主目的は、伊澤(1878)が、「音楽ハ学童神氣ヲ爽快ニシテ其ノ勤學ノ勞ヲ消シ、肺臟ヲ強クシテ其ノ健全ヲ助ケ…」¹⁾と示したように、心身の鍛錬であった。歌唱表現は、子どもの健やかな心身の成長と、情緒を育む情操教育の面から有益との理由により、『幼年唱歌』や『小学唱歌』が、保育や教育の場に取り入れられていったのである。これらの唱歌には、現在でも教科書で使用されている作品もあり、「ちょうちょう」は、明治14年刊行の『小学唱歌集』に、「春が来た」「虫のこえ」「ふじの山」は、明治43年刊行の『尋常小学読本唱歌』に掲載された作品である。子どもの頃に歌唱した歌は、時を超えて口ずさむことができる。その後、親となって子育てをする中でも歌われ、更には、祖父母となり、孫との遊びの中でも一緒に親しむことができるだろう。子どもの歌に親しむということは、世代を超えて楽しむことが可能であり、また、歌い継ぐことで音楽

文化の伝承に繋がる。

平成30年度より施行された『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の領域「表現」の内容には、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなど楽しさを味わう。」と明記されている。子どもが歌の楽しさを味わえるように、また、そのような音楽表現活動が行えるように、保育者は、積極的な支援や援助、また配慮をしなければならないのである。子どもにとって、歌を歌うということは、大切な表現活動の一つといえる。小畠（2016）は、「幼児は、子どもの歌を〈聴いて、覚えて、歌う〉の連続でらせん状に成長する。聴くことは感じる、覚えることは模倣すること、歌うことは口ずさむことである。」と述べている²⁾。子どもは、保育者が歌う曲を聴き覚え、遊びの中にそれらを取り入れながら、音楽に親しんでいくのである。

それでは、保育者の歌声はどのような歌い方が要求されているのであろうか。要領・指針の解説書には、「大人が、歌を歌ったり、楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、子どもが音楽に親しむようになる上で重要な経験である。」と記されている。しかし、保育者の声質については記されていない。保育者の歌唱表現が、子どもの歌の修得に何らかの影響を与えることを考慮すると、子どもが歌の世界観を豊かに感じ取れるように、保育者は、自然な美しい声で、日本語を美しく発音し、正しい音程で歌唱する技量が求められるといえよう。保育者の子どもの歌の歌唱の指導法について、高御堂（2013）は、「保育者自身が、美しく柔らかい声でうたってきかせることが第一」と述べている³⁾。小川ら（2013）は、「保育者の歌声は保育を取り巻く環境の一部である」と示し、保育環境に相応しい歌声について、あたたかさ、柔らかさ、明瞭感、透明感のある声が好ましいと述べている⁴⁾。

実際、教育・保育現場では、そのような声で保育者らが子どもの歌を歌唱し、指導を行っているのであろうか。筆者が実習指導等で幼稚園や保育園を訪問した際には、子どもが怒鳴り声で歌唱している場面が、度々あった。保育者らは、「元気よく」と言葉掛けを行い、歌い声が小さい時は、もっと大きな声を出すように求めていた。保育者の中には、元気な声と大きな声を同義に捉えて指導を行っている者もいるだろう。そのような指導の下では、子どもが怒鳴り声で歌唱してしまうケースが、大凡みられるのである。その結果、子どもの歌唱表現は、言葉や音程、フレーズ感から逸脱し、作品に込められた曲想を十分に味わう機会も失わせてしまうのである。保育者は、子どもの歌唱表現が、豊かな音楽表現に導けるように、子どもの歌声の質について、関心を持つことが大切といえよう。また、保育者は、歌の模範演奏を行ったり、絵本の読み聞かせを行ったり、保育の日常の中でも、常に声を発する機会が多いことから、自身の声についても関心を持つべきであろう。

2. 目的

子どもの歌唱指導について、要領・指針の解説には、「大切なこととして、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、園児自らが音で十分に遊び、表現する楽しさを味わうことである。」とあり、音楽的成果を求めるのではなく、音楽的資質の基礎を養う重要性が説かれている。行事等で子どもに歌唱発表や簡単な器楽合奏の披露演奏を行う際、成果を求めるあまり、子どもの音楽表現の楽しさを見失わないように、指導することを戒めているといえよう。これらの音楽表現活動が、子どもの主体性から発せずに、保育者の叱

責等で繰り広げられたとしたら、その後の音楽嫌いにも繋がる危険性を有してしまうともいえる。それには、保育者自身が音楽表現活動を楽しみと感じ、それを子どもと共有していくことが、求められているのである。保育者を目指す学生は、歌う楽しさや歌う喜びを通して、子ども歌の知識や歌唱技術、その指導法について学ぶことが大切である。保育者養成校における子どもの歌の歌唱指導の先行研究において、長井（2008）は、「子どもの歌の歌い方について、学生が心から歌うことを楽しむことで、将来、子どもと感動を共感できる心の通った保育者を育てることができる。」と述べている⁵⁾。また、基村（2018）は、自分の感じていることや表現することが苦手、もしくは、表現する力が未熟な学生が多いと述べ、「歌を通じた〈快〉の感動体験を多く経験することで、自己認識力が豊かとなり、その結果、自己表現力の向上に伴い、子どもの歌の歌唱表現活動の幅を広げることに繋がる。」と述べている⁶⁾。

保育者養成校である本学においても、子どもの歌の知識と歌唱技術の修得のために、「保育表現技術（音楽2）」（以下「音楽2」）の授業において、90分の授業を30分ずつ、ピアノによる弾き歌いの技術（以下、弾き歌い）と、子どもの歌の知識と歌唱法（以下、歌唱法）、子どもの歌を活用した音楽遊び（以下、活用法）の3つのグループに分け、それらをローテーションしながら、全て受講するという授業を行っている。筆者は、歌唱法の授業を担当し、30分という非常に厳しい時間的制約の中ではあるが、発声法、呼吸法、そして、発音法、子どもの歌についての知識、その歌唱法について指導を行っている。

学生がそれらの学習を効率よく学べるように、授業を研究することは、大変意義深いといえる。学生の子どもの歌の歌唱における留意点や注目点を探ることから、学生が歌うことの感動体験を多くできるようにするには、学生がどのようなことを考えて歌唱しているのか、それを明らかにすることで、今後の授業展開における改善の要点を得たい。

3. 歌唱法の授業

（1）「音楽2」における歌唱法の授業について

1年生後期に実施している。平成30年度の受講生はAクラス47名、Bクラス45名、総数92名であった。子どもの歌に関する知識と歌唱技術の習得をするために、第1回オリエンテーション、子どもの発達と声、第2回呼吸法、生活の歌、第3回発声法、春の季節の歌、第4回日本語の発音、夏の季節の歌、第5回明瞭な発音法、秋の季節の歌、第6回リズムと歌唱表現、冬の季節の歌、第7回身体と歌唱表現、乗物の歌・動物の歌、第8回歌唱と表現力、春の行事の歌、第9回子どもの身体と歌唱表現、夏の行事の歌、第10回子どもの歌唱とリズム、秋の行事の歌、第11回身近な楽器と歌唱表現、クリスマスの歌、第12回日本の文化と歌唱表現、冬の行事の歌、第13回子どもの歌の世界観と歌唱表現、園生活の行事の歌、第14回ア・カペラによる歌唱発表、第15回弾き歌い演奏発表の授業を展開している。授業では30分の時間内で毎回子どもの歌を4曲ずつ取り上げ、その楽曲は、1年生前期「保育表現技術（音楽1）」、後期の「音楽2」の弾き歌いや活用法、2年生前期「保育表現技術（音楽3）」授業で取り扱う曲を除いて構成を行った。歌唱する子どもの歌の楽曲の詳細について、表1に示す。

表1 歌唱法の授業内容

授業	知識	楽曲の種類	楽曲の内容
1	子どもの発達と声	オリエンテーション	子どもの歌の歌唱法について
2	呼吸法	生活の歌	すじのうた(夢虹二作詞/小谷肇作曲)、せんせいとおともたち(吉岡治作詞/越部信義作曲)、たんじょう日(与田準一作詞/酒田富治作曲)、おはようのうた(高すすむ作詞/渡辺茂作曲)
3	発声法	春の季節の歌	ちょうちょう(作詞者不明/スペイン民謡)、びよんびよんカエル(作詞者/作曲者不明)、春(吉田トミ作詞/井上武士作曲)、春よこい(相馬御風作詞/弘田龍太郎作曲)
4	日本語の発音法	夏の季節の歌	トマト(荏司武作詞/大中原作曲)、みずあそび(東くめ作詞/滝廉太郎作曲)、なみとかいがら(まどみちお作詞/中田喜直作曲)、金魚のひるね(鹿島鳴秋作詞/弘田龍太郎作曲)
5	明瞭な発音法	秋の季節の歌	こおろぎ(關根栄一作詞/芥川也寸志作曲)、大きな栗の木の下で(訳詞者不明/外国曲)、もみじ(古村徹三作詞/日本教育音楽協会)、まつぼっくり(広田孝夫作詞/小林つや江作曲)
6	リズムと歌唱表現	冬の季節の歌	雪のペンキやさん(則武昭彦作詞/安藤孝作曲)、ペンギンちゃん(まどみちお作詞/中田喜直作曲)、雪のこぼろ(村山寿子作詞/外国曲)、ごんべさんのあかちゃん(作詞者不明/アメリカ民謡)
7	身体と歌唱表現	乗物・動物の歌	せんろはつづくよどこまでも(佐々木敏作詞/アメリカ民謡)、つばめ(則武昭彦作詞/安藤孝作曲)、小鳥のうた(与田準一作詞/芥川也寸志作曲)、かわいいかくれんぼ(サトウハチロー作詞/中田喜直作曲)
8	歌唱と表現力	春の行事の歌	こいのぼり(えほん唱歌)、おかあさん(西條八十作詞/中山晋平作曲)、せっけんさん(まどみちお作詞/富永三郎作曲)、おすもう(まちゃん/佐藤義美作詞/磯部叔作曲)
9	子どもの身体と歌唱表現	夏の行事の歌	あめ(杉山)米子作詞/小松耕輔作曲)、おたまじゃくし(望月クニ子作詞/田中鏡之助作曲)、たなばたまつり(えほん唱歌)、やまびこつこ(おうちやすゆき作詞/若月明人作曲)
10	子どもの歌唱とリズム	秋の行事の歌	月(文部省唱歌)、いもほりのうた(高杉自子作詞/渡辺茂作曲)、うんどうかい(則武昭彦作詞作曲)、うんどうかい(益子とし作詞/本多鉄磨作曲)
11	身近な楽器と歌唱表現	クリスマスの行事の歌	やまのおんがく(水田詩仙作詞/ドイツ民謡)、あわてんぼうのサンタクロース(吉岡治作詞/小林亜星作曲)、サンタクロース(水田詩仙作詞/フランス民謡)、赤鼻のトナカイ(新田重夫作詞作曲)
12	日本の文化と歌唱表現	冬の行事の歌	カレンダーマーチ(井出隆夫作詞/福田和禾子作曲)、お正月(東くめ作詞/滝廉太郎作曲)、たこのうた(文部省唱歌)、まめまき(えほん唱歌)
13	子どもの歌の世界観と歌唱表現	園生活の行事の歌	一年生になったら(まどみちお作詞/山本直純作曲)、思い出のアルバム(益子とし作詞/本多鉄磨作曲)、そつぎょうしきのうた(天野蝶作詞/一宮道子作曲)、サヨナラぼくたちのほいくえん(新沢としこ作詞/島簡英夫作曲)
14			アカペラによる子どもの歌の歌唱発表
15			弾き弾きによる子どもの歌の演奏発表

第2回に実施した呼吸法と、第3回に実施した発声法については、以降の授業開始時に毎回行い、第4回で実施した日本語の発音法では、鼻濁音を含め、美しい日本語で歌唱するための方法を、そして、第5回で実施した明瞭な発音法による歌唱法については、それ以降、子どもの歌を歌唱する際に、毎回、指導に取り入れ、子どもの歌を歌唱するために必要な知識や技術を蓄積するために、継続して行えるように配慮した。気持ちを込めて歌唱できるようにするためには、筆者の3稿の既報（河合、2015、2016、2017）において、学生が日本語の助詞に注目して歌唱することで、言葉への意識が高まり、歌詞のイメージや心を込めて歌唱することに効果があつた⁷⁾ことから、助詞の扱いに対して留意を伝え、具体的な歌詞の内容についての指示は示さず、学生自らがその世界観を想像できるように、また、感情をいれられるように、個々の学生に一任した。

（2）子どもの歌の歌唱時の意識について

第1回オリエンテーションの際、第14回で実施するア・カペラによる子どもの歌の歌唱発表について、8つの留意点の説明を行った。その内容は①音程、②リズム、③発音・言葉、④声の音量、⑤声の美しさ、⑥姿勢、⑦表情、⑧曲のイメージである。①の音程を正しく歌唱するためには、先ず、聴くことが大切となる。他者を聴く、伴奏の音を聴く、子どもの歌声を聴くことに結び付いていく。②の発音は、口蓋や歯列、舌根、舌下における緊張と弛緩の連動から発せられるが、その構造の違いや特徴から、発音の得手、不得手が生じる。また、日本語の「あ」「い」「う」「え」「お」の母音は、全て同じ音ではない。例えば、「赤い」の「あ」と「青い」の「あ」では、その響きや音色に違いがある。この違いを意識的に明確に発音することで、聴く側のイメージに影響を与えるのである。言葉の発音に意識を配ることは、自分の声の認知に

繋がり、自らが表現したいことに近づく一歩といえるだろう。言葉について、「あめ」と目にした場合と、漢字で「雨」と目にした場合では、受けての感じ方が異なるだろう。「あめ」は、「飴」も「編め」の可能性も生じる。歌唱する際は、一音に一語で表現されることから、「あ」「め」と分化される。言葉の意をしっかりとイメージすることが大切である。④声の音量について、声量は声帯だけに頼って出そうと思っても、出せるものではない。新生児が、全身から産声をあげるように、吸気と呼気のバランスと全身を使うことで可能となる。身体の筋肉を使うことで、声帯に係る負担も軽減する。授業受講時の学生の発言や発表の際に多くみられたことであるが、語頭は声が大きいが、息の減少に伴い、語尾が不明瞭になる学生や、逆に、語尾を強調してしまう学生が随分とみられた。保育者となった時の音声障害を防ぐ意味でも、呼吸法と結びつけて、全身を使った声の出し方を学んでもらいたい。⑤声の美しさについて、学生はどのくらい認識しているのだろうか。顔やスタイルについては、鏡に映すことで自己を客観的に見ることができる。声についてはどうであろうか。録音した自分の声を聴いた時、誰しもが、自分の声との差異を感じるのではないだろうか。普段、発して聴いている自分の声は、内耳を通して聴いている声であり、自己の声を客観的に認識するのは難しい。自分の声に対し、無頓着にならず、自己の声をよく聴き、自己の声が美しい声で発せられているのかを、意識することが大切といえる。⑥姿勢は、呼吸を助け、声を支え、また、全身の骨格と筋肉の連動の助けとなる重要なポイントである。発声法の「声の支え」とは、声帯に力を入れるのではなく、身体の筋肉を使って声を「保つ」という意味である。無駄な力を入れず姿勢を保つことは、声を保つ、呼吸を保つことに繋がるのである。自由な動きへの準備が整っているということであり、フレーズ感やリズム感、また、思い描く自己の自由な表現に繋がっていくと考える。⑦表情には、顔の表情と、曲の表情の2つの解釈がある。顔の表情と捉えた場合、表情筋を豊かに使うことが狙いとなる。頬の筋肉を上げることで口角も上がり、表情は明るくなる。その状態で口を開けると、口蓋の空間が広がり、豊かな響きのある声を発することが可能となる。更に、口の周りの筋肉をよく使うことで、発音や滑舌が明瞭となる。鼻腔を広げようとすることで、響きが豊かになる。顔や頭部全体の筋肉を駆使して歌唱することが大切といえよう。悲しい・暗い曲だからといって、顔の表情で表現しようとする、眉が下がり、口角も下がってしまうので、歌う時は、曲想に左右されず、表情筋を使った響きのある声で歌唱してもらいたい。その結果、曲の表情も、豊かに表現できると考える。⑧曲のイメージは、学生自身の想像する世界観である。学生は、この世界観を持つことが重要なのである。

①～⑧までの項目は、相互に作用し合あうことで、コントロールの効いた、柔らかく豊かな響きのある歌声を生む。学生は、気持ちを込めて表現する喜びと、人に伝える喜びに気付くきっかけとなり、子どもの前で歌唱する際の自信に繋がるのではないかと考える。

(3) 子どもの歌の歌唱時の意識調査とその方法

第1回オリエンテーションの際、上記の①～⑧の説明を行った後に、子どもの歌の歌唱する時にどのようなことに比重をかけているのかについて、Aクラス47名とBクラス45名を対象に、アセスメントシートの実施を行った。

音楽の技術の習得には個人差があり、それぞれ課題を有している。また、その習得法についても個々の練習量の差によることが大きい。授業を開始するにあたり、アセスメントシートを用いることで学生自身による現状の認知と今後の授業展開に向けた取組みに対し自覚を促し、主体的な学びにつながることをねらいとした。また、歌唱法の授業はグループ指導で行うので、

個々の直接的な指導は行えないが、学生個々の状態を把握することで全体への喚起を行う際にその要素を含むように指導することは可能ではないかと考えた。その内容を図1に示す。

設問1の（ ）については、学生各自の判断で大切と思うものに丸印を付けてもらいその回答を分析する。歌唱する際、人は多くの項目すべてに留意して行うことは困難を極める。ある程度の留意点、また、学生の価値観から注目する項目に焦点をあてることで問題点や課題について克服していくと考える。特に、まだ歌唱法の授業を受講していない場合は、それが顕著になると推測することから、あえて順位を付けてもらい、分析を行うことで、学生の子どもの歌に対する視点と、スキルの現状を深く推察することが可能と考える。そして、その理由を分析することで学生の考えについて明らかにしたい。

設問2については、それぞれの項目についての現状について自己分析を行い、現状を認識することで授業での知識や技術の修得の自己評価を促したい。

設問3については、3（2）項で記述したが、①から⑧までの項目は相互に作用することで自然で美しく、豊かな響きのある歌声を得るための一方法である。将来、教育者・保育者として活躍を夢見る学生は、別の考えが存在するに違いない。自由記述の内容を分析することで、今後の授業展開や学生指導に役立てたい。

「保育表現技術（音楽2）」子どもの歌の歌唱法 意識調査

第1回授業 平成30年 月 日

1. 子どもの歌を歌う時に大切と思うものに（ ）丸印をつけ、大切と思う順にその番号を記入してください。またその理由も記載してください。

あてはまること	内容	順位	その理由
()	①音程	() []	
()	②リズム	() []	
()	③言葉・発音	() []	
()	④声の音量	() []	
()	⑤声の美しさ	() []	
()	⑥姿勢	() []	
()	⑦表情	() []	
()	⑧曲のイメージ	() []	

2. 子どもの歌を歌唱する時、現在自分ができている程度について、当てはまる数字に○印をつけてください。

	できない	ややできない	どちらでもない	ややできる	できる
①音程	1	2	3	4	5
②リズム	1	2	3	4	5
③言葉・発音	1	2	3	4	5
④声の音量	1	2	3	4	5
⑤声の美しさ	1	2	3	4	5
⑥姿勢	1	2	3	4	5
⑦表情	1	2	3	4	5
⑧曲のイメージ	1	2	3	4	5

3. そのほか、子どもの歌を歌唱する際に気を付けていることがあれば具体的に記述してください。

※この資料の一部を授業改善に伴う研究に使用することに同意して下さる方は、ご記入ください。尚、その場合個人が特定されることはいたしません。

署名 _____

図1 子どもの歌の歌唱におけるアセスメントシート

4. 結果

第1回目の授業欠席者と研究に承諾のなかった学生を除いた受講者にて分析を行うこととした。実施日についてはどちらのクラスも第1回目の授業日であるAクラスが平成30年9月25日、Bクラスが平成30年10月2日に行った。有効回答数は、Aクラスが44名、Bクラスが38名、総数82名に対して結果を報告する。

（1）子どもの歌を歌う時に大切と思うことにあてはまる項目

設問1の大切と思う項目について丸印を記載した学生は、①音程が67名、②リズムが71名、③言葉・発音が57名、④声の音量が80名、⑤声の美しさが34名、⑥姿勢が55名、⑦表情が80名、⑧曲のイメージが58名であった。また、無記入の学生は、①が15名、②が11名、③が26名、④が2名、⑤が48名、⑥が26名、⑦が2名、⑧が24名であった。その詳細については表2に示す。

表2 子どもの歌を歌唱する上で大切なことの順位数 N=82

	記入数	1	2	3	4	5	6	7	8	無記入数	総数
①音程	67	11	14	14	12	9	5	2	0	15	82
②リズム	71	12	15	20	15	5	4	0	0	11	82
③言葉・発音	57	1	4	6	12	13	7	11	2	26	82
④声の音量	80	30	25	16	4	4	0	1	0	2	82
⑤声の美しさ	34	0	0	0	0	2	4	8	20	48	82
⑥姿勢	55	3	2	4	14	6	16	10	1	26	82
⑦表情	80	23	19	16	12	9	0	0	1	2	82
⑧イメージ	58	2	3	6	8	14	14	7	4	24	82

(2) 子どもの歌を歌唱する際に大切に思う順位の回答

設問1の大切に思う順位についての学生の回答は、①が67名(81.71%)、②が71名(86.59%)、③が57名(69.51%)、④が80名(97.56%)、⑤が34名(41.46%)、⑥が55名(67.07%)、⑦が80名(97.56%)、⑧が58名(70.73%)であった。無記入の学生の回答は、①が15名(18.29%)、②が11名(13.41%)、③が26名(31.71%)、④が2名(2.44%)、⑤が48名(58.54%)、⑥が26名(31.71%)、⑦が2名(2.44%)、⑧が24名(29.27%)であった。それらの詳細については表3に示す。

表3 子どもの歌を歌唱する上で大切な順位とその割合

N=82(%)

項目	記入数(%)	1	2	3	4	5	6	7	8	無記入数(%)	総数
①音程	67(81.71)	11(13.41)	14(17.07)	14(17.07)	12(14.63)	9(10.98)	5(6.10)	2(2.44)	0(0)	15(18.29)	82(100)
②リズム	71(86.59)	12(14.63)	15(18.29)	20(24.39)	15(18.29)	5(6.10)	4(4.88)	0(0)	0(0)	11(13.41)	82(100)
③言葉・発音	57(69.51)	1(1.22)	4(4.88)	6(7.32)	12(14.63)	13(15.85)	7(7.07)	11(13.41)	2(2.44)	26(31.71)	82(100)
④声の音量	80(97.56)	30(36.59)	25(30.49)	16(19.51)	4(4.88)	4(4.88)	0(0)	1(1.22)	0(0)	2(2.44)	82(100)
⑤声の美しさ	34(41.46)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2.44)	4(4.88)	8(9.76)	20(24.39)	48(58.54)	82(100)
⑥姿勢	55(67.07)	3(3.66)	2(2.44)	4(4.88)	14(17.07)	6(7.32)	16(19.51)	10(12.20)	1(1.22)	26(31.71)	82(100)
⑦表情	80(97.56)	23(28.05)	19(23.17)	16(19.51)	12(14.63)	9(10.98)	0(0)	0(0)	1(1.22)	2(2.44)	82(100)
⑧イメージ	58(70.73)	2(2.44)	3(3.66)	6(7.32)	8(9.76)	14(17.07)	14(17.07)	7(7.07)	4(4.88)	24(29.27)	82(100)

更に、順位で1位から3位の高順位に回答したものを肯定的、4位から6位に回答したものを中間的、7位8位と無記入の回答について非肯定的と捉え、その総数と割合について分析を行った。①は肯定的が39名(47.56%)、中間的が26名(31.71%)、非肯定的が17名(20.73%)、②は肯定的が47名(57.32%)、③中間的が24名(29.27%)、非肯定的が11名(13.41%)、④は肯定的が11名(13.41%)、中間的が32名(39.02%)、非肯定的が39名(47.56%)、⑤は肯定的が71名(86.59%)、中間的が8名(9.76%)、非肯定的が3名(6.66%)、⑥は肯定的が0名(0%)、中間的が6名(7.32%)、非肯定的が76名(92.68%)、⑦は肯定的が9名(10.98%)、中間的が36名(43.90%)、非肯定的が37名(45.12%)、⑧は肯定的が58名(70.73%)、中間的が21名(25.61%)、非肯定的が3名(6.66%)、⑧は肯定的が11名(13.41%)、中間的が36名(43.90%)、非肯定的が35名(42.68%)であった。その結果を表4に示す。そして、回答数が多かった箇所に色付けを行った。

また、学生の回答の順位における比重を探るために、1位を8点、2位を7点、3位を6点、4位を5点、5位を4点、6位を3点、7位を2点、8位を1点、無記入については0点として換算し、数字による視覚化を図った。最も総合得点が高かった順は、1位が④、2位が⑦、3位が②、4位が①、5位が③と⑧、7位が⑥、8位が⑤であった。その詳細を表5に示す。そして、順位付けて高得点であった個所に色付けを行った。また、表5の順位のグラフを図2、その得点における割合を図3に示す。

表4 子どもの歌を歌唱する上で肯定的（1～3）、中間的（4～6）、非肯定的（7～無記入）の総数と割合

	記入数(%)	1	2	3	4	5	6	7	8	無記入数(%)	総数(%)
①音程	67(81.71)	11(13.41)	14(17.07)	14(17.07)	12(14.63)	9(10.98)	5(6.10)	2(2.44)	0(0)	15(18.29)	82(100)
②リズム	71(86.59)	12(14.63)	15(18.29)	20(24.39)	15(18.29)	5(6.10)	4(4.88)	0(0)	0(0)	11(13.41)	82(100)
③言葉・発音	57(69.51)	1(1.22)	4(4.88)	6(7.32)	12(14.63)	13(15.85)	7(8.54)	11(13.41)	2(2.44)	26(31.71)	82(100)
④声の音量	80(97.56)	30(36.59)	25(30.49)	16(19.51)	4(4.88)	4(4.88)	0(0)	1(1.22)	0(0)	2(2.44)	82(100)
⑤声の美しさ	34(41.46)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2.44)	4(4.88)	8(9.76)	20(24.39)	48(58.54)	82(100)
⑥姿勢	55(67.07)	3(3.66)	2(2.44)	4(4.88)	14(17.07)	6(7.32)	16(19.51)	10(12.20)	1(1.22)	26(31.71)	82(100)
⑦表情	80(97.56)	23(28.05)	19(23.17)	16(19.51)	12(14.63)	9(10.98)	0(0)	0(0)	1(1.22)	2(2.44)	82(100)
⑧イメージ	58(70.73)	2(2.44)	3(3.66)	6(7.32)	8(9.76)	14(17.07)	14(17.07)	7(8.54)	4(4.88)	24(29.27)	82(100)

表5 子どもの歌を歌唱する上で大切に思う順位、1位8点～無記入0点に換算した点数とその総合順位

	記入数(%)	1(8点)	2(7点)	3(6点)	4(5点)	5(4点)	6(3点)	7(2点)	8(1点)	無記入(0点)	総数(合計点)	順位
①音程	67(81.71)	11(88)	14(98)	14(84)	12(60)	9(36)	5(15)	2(4)	0(0)	15(0)	82(385)	4
②リズム	71(86.59)	12(96)	15(105)	20(120)	15(75)	5(20)	4(12)	0(0)	0(0)	11(0)	82(428)	3
③言葉・発音	57(69.51)	1(8)	4(28)	6(36)	12(60)	13(52)	7(21)	11(22)	2(2)	26(0)	82(229)	5
④声の音量	80(97.56)	30(240)	25(175)	16(96)	4(20)	4(16)	0(0)	1(2)	0(0)	2(0)	82(549)	1
⑤声の美しさ	34(41.46)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(8)	4(12)	8(16)	20(20)	48(0)	82(56)	8
⑥姿勢	55(67.07)	3(24)	2(14)	4(24)	14(70)	6(24)	16(48)	10(20)	1(1)	26(0)	82(225)	7
⑦表情	80(97.56)	23(184)	19(133)	16(96)	12(60)	9(36)	0(0)	0(0)	1(1)	2(0)	82(510)	2
⑧イメージ	58(70.73)	2(16)	3(21)	6(36)	8(40)	14(56)	14(42)	7(14)	4(4)	24(0)	82(229)	5

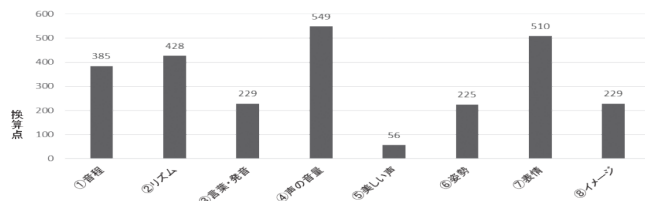


図2 子どもの歌を歌唱する上で大切に思う順位の換算グラフ

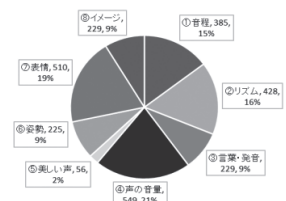


図3 大切に思う項目の換算得点による割合

(3) 子どもの歌を歌唱する際に大切に思う順位の理由の回答

設問1の理由に対する回答について、大切に思う理由を述べてもらうように示していたが、必ずしも全員が記入したわけではなかった。記述内容について、なるべく学生の記述をそのまま掲載するようにしたが、筆者の判断で内容が同じ、または類似すると判断した場合は同意見とみなした。その内容を表6に示す。記述内容の意見が多かったものから順次記載を行った。また、() 内については2名以上の同記述があった数を示している。

(4) 子どもの歌を歌唱する上で、できていると評価した内容についての回答

設問2の回答について、表7に示す。また、5件法の結果の割合について、表8に示す。そして、5件法で、1できない、2ややできない、の非肯定的な回答と、3の中間的回答、4ややできる、5できる、の肯定的な回答の3つのグループに分けた分析結果を表9に示す。表7は、①～⑧までのそれぞれの項目の中で最も回答数の多かった箇所、表8は、1できないから、5できる、の項目で最も回答数の多かった箇所に色付けをおこなった。

子どもの歌の歌唱表現の方法についての一考察

表6 子どもの歌を歌唱する上で大切と思う理由の内容

項目	記述数	理由内容(記述数)
①音程	67	曲が変わってしまってもどんな歌かわからない(10)、正しい音程で歌うことで曲全体が成り立つ(9)、外して歌ってもまずは声を出すことが大切(8)、どんな歌かを子どもに伝えなければなら(7)、子どもが間違えたまま曲を覚えてしまうから(7)、音程が合っていると綺麗に聞こえる(5)、正しくない子どもが歌えない(5)、正しい音程で歌うことで子どもの耳がよくなる(4)、正しい音程を教えた方が歌っていて楽しい(3)、音程が違うのは聞きたくないと思う(2)、ほどほどに合わせて歌うことが大切(2)、音程が合っていないとリズムにのれない、外れて歌うと恥ずかしい、音程を気にしすぎて歌ってはだめだと思う、音の強弱と同様に大切、正しい音程で歌うことが大切
②リズム	68	歌にならないから(14)、リズムを取ることで子どもも歌いやすくなる(10)、リズムにのって歌うと楽しい(9)、揃って歌うことが大切だから(7)、子どものリズム感がつく(6)、正しいリズムで歌わない子ども間違えてしまう(6)、正しいリズム感が大切(6)、リズムがバラバラだと子どもも歌えなくなる(2)、曲の雰囲気や曲のイメージに大切だから(2)、リズムが揃うと楽しい、リズムがあっていると伴奏と合わないから、リズムも音程と繋がっている、みんなて息を合わせるとリズムにのって身体を使った遊びに発展できる、リズムが合っていれば曲として何とかなる
③言葉・発音	55	子どもの言語発達に繋がるから(16)、歌詞の意味が伝わらないから(14)、ハキハキとはっきり発音することが大切(9)、歌詞が聞き取れることが大切(4)、きれいな発音は子どもも歌いやすくなる(3)、歌うことを楽しめればよい(2)、きちんと発音することで声の出し方や良い歌声に繋がる、発音が間違っていたら違う歌になる、イントネーションはそれぞれで標準で歌った方がよい、滑舌が苦手なので気を付けたい、ある程度の発音は必要、発音をよくするとみんながまとまる、発音で踊って歌が嫌いにならないようにすることが大切
④声の音量	74	子どもに聞こえなかった意味がない(31)、子どもに聞こえない子どもも歌えないから(15)、大きな声で元気に歌うことが大切(5)、ただ大きな声だけではなく音量を調節のできる(4)、元音よく歌うと声量もあがる(3)、恥ずかしがって小さい声で歌っていては楽しくない(2)、ピアノの伴奏に負けずに子どもに声が届かない(2)、盛り上がるから(2)、声が小さいと楽しそうに聞こえない(2)、大きい声で歌うことで子どもも恥ずかしがらずに歌うことができる(2)、声が小さいと元気に歌えない子どもも楽しくないから(2)、大きな声を出すことが大切、元音よく歌うには声量も必要、子どもは元気にイメージだから元音よく歌わせることが大切、音量に関係なく楽しく歌えればよい、子どもが真似をするから、
⑤声の美しさ	43	歌がきれいに聞こえる(5)、聴いていて心地よい(4)、声の美しさは大切(3)、美しさは気にせず楽しければよい(3)、美しさより元音の声が一番(3)、美しさは求めなくてよい(2)、きれいな声は気持ちよく歌える(2)、子どもに美しさはまだまだない(2)、子どものお手本となるので大切(2)、歌の素晴らしいさを伝えるため、子どもの聴覚に与える影響が大きいから、全ての事ができてから美しさを求める、子どもの見本になるような声になりたい、声が美しかったら楽しい、響きのある声は子どもにも良い、声量を気にして叫ぶような声は聞き苦しい、美しくて聞けようと思うことが大切、声の美しさは大切だが他の方がもっと大切、声が歌にならないように注意を付ける、みんなで歌う時はハーモニーが大切、高い声や低い声もしっかり出す、聴きとり易くなる、音楽がまとまる、美しい声より明るく歌えればよい、他の項目ほど大切ではない、曲として成立するためには最低限は必要
⑥姿勢	60	姿勢が悪いと声が出にくく良い姿勢は良い声で出る(30)、子どものお手本となるから(6)、姿勢が悪いと印象も悪くみえるから(4)、姿勢よく歌わないと良いと思われない(4)、取り組む姿勢でやる気が判断できる(3)、だらしない姿勢では自分だけでなく子どもも楽しくないから(2)、美しい姿勢は見ていて気持ちよく歌えるように思える(2)、座っていても背筋を伸ばすことが大切、姿勢を正すことで表情も変わる、正しい姿勢は良い呼吸法に繋がる、姿勢が悪いと暗い印象を与える、楽しく歌えれば子どもも楽しくて良い、音楽以外でも大切なこと、できなくても他で補える
⑦表情	74	笑顔が大切だから(8)、曲のイメージを伝えるため(7)、暗い表情では楽しく歌えないから(7)、楽しく歌わないと楽しさが伝わらない(7)、楽しそうな表情でないと子どもも歌おうと思わないから(5)、子どもは保育者の表情を見て曲の雰囲気を判断するから(5)、楽しそうに歌うと周りにも楽しい影響を与える(5)、明るく楽しい表情の方が子どもも楽しめる(4)、歌の楽しさを伝えるため(3)、楽しそうに歌うことが大切(3)、無表情で歌うと怖い印象を与える(3)、表情を変えないで声質が変わり子どもも表情を見て歌い方を学ぶから(2)、笑顔で歌うことが大切(2)、子どもも真似をするから(2)、表情が暗い曲のイメージも悪くなる(2)、感情を表現する、感情を伝えるため、子どもも笑顔で歌ってもらいたい、表情で曲の印象が変わるから、歌の雰囲気や顔の表情を合わせることが大切、上手に歌うことより楽しむことが大切、表情が悪いと暗い印象と声もでない、表情を作ることでも上手に聞こえる、元気に歌えればよい
⑧イメージ	60	イメージをするとかいやすくなる(9)、イメージすることで歌い方や声に変化ができる(6)、想像力がつくから(5)、イメージすることで歌が楽しくなる(5)、曲のイメージを持って歌うことが大切(5)、季節や感情を感じるようになることは大切(4)、イメージすることで感情が込められる(3)、イメージを無視しては曲の良さがなくなるから(2)、曲のイメージを伝えることが大切だから(2)、場面のイメージを思考することが大切だから(2)、曲のイメージや世界観を持つことが大切(2)、イメージすることで表現力が深まる(2)、曲の内容を理解しやすくなることで声量やリズムに発達するから、曲の雰囲気が伝わらないから、曲の内容を理解しやすくなり、イメージを伝えることで子どもの表現力がく、歌で伝えることが大切、イメージすることで楽しさが広がる、明るいイメージを持つことが大切、楽しい曲は楽しいイメージを持つと更に楽しくなる、曲が暗いときの場の雰囲気も壊れる、曲の物語をイメージすると楽しく歌える、イメージすることで思いが伝わってくる、歌詞や曲調からイメージをするのも良い、イメージするのはまだ難しい

表7 子どもの歌の歌唱についてできている程度の回答数 N=82

項目	1. できない	2. ややできない	3. どちらでもない	4. ややできる	5. できる	回答なし	総数
①音程	10	19	20	22	10	1	82
②リズム	7	15	20	27	12	1	82
③言葉・発音	5	6	38	28	4	1	82
④声の音量	10	24	29	12	6	1	82
⑤声の美しさ	11	23	40	7	0	1	82
⑥姿勢	4	12	36	23	7	0	82
⑦表情	3	16	31	23	9	0	82
⑧イメージ	3	12	36	24	7	0	82
合計	53	108	250	166	55	5	

表8 子どもの歌の歌唱する上でできている程度の回答数とその割合 N=82(%)

項目	1. できない	2. ややできない	3. どちらでもない	4. ややできる	5. できる	回答なし	総数
①音程	10(12.20)	19(23.17)	20(24.39)	22(26.83)	10(12.20)	1(1.22)	82(100)
②リズム	7(8.54)	15(18.29)	20(24.39)	27(32.93)	12(14.63)	1(1.22)	82(100)
③言葉・発音	5(6.10)	6(7.32)	38(46.34)	28(34.15)	4(4.88)	1(1.22)	82(100)
④声の音量	10(12.20)	24(29.27)	29(35.37)	12(14.63)	6(7.32)	1(1.22)	82(100)
⑤声の美しさ	11(13.41)	23(28.05)	40(48.78)	7(8.54)	0(0)	1(1.22)	82(100)
⑥姿勢	4(4.88)	12(14.63)	36(43.90)	23(28.05)	7(8.54)	0(0)	82(100)
⑦表情	3(3.66)	16(19.51)	31(37.80)	23(28.05)	9(10.98)	0(0)	82(100)
⑧イメージ	3(3.66)	12(14.63)	36(43.90)	24(29.27)	7(8.54)	0(0)	82(100)

(5) その他に大切にしていることの記述についての回答

表9 子どもの歌を歌唱する上でできている程度の非肯定的(1~2)、中間的(3)、肯定的(4~5)回答数と割合 N=82(%)

項目	1. できない	2. ややできない	3. どちらでもない	4. ややできる	5. できる	回答なし	総数
①音程	10(12.20)	19(23.17)	20(24.39)	22(26.83)	10(12.20)	1(1.22)	82(100)
②リズム	7(8.54)	15(18.29)	20(24.39)	27(32.93)	12(14.63)	1(1.22)	82(100)
③言葉・発音	5(6.10)	6(7.32)	38(46.34)	28(34.15)	4(4.88)	1(1.22)	82(100)
④声の音量	10(12.20)	24(29.27)	29(35.37)	12(14.63)	6(7.32)	1(1.22)	82(100)
⑤声の美しさ	11(13.41)	23(28.05)	40(48.78)	7(8.54)	0(0)	1(1.22)	82(100)
⑥姿勢	4(4.88)	12(14.63)	36(43.90)	23(28.05)	7(8.54)	0(0)	82(100)
⑦表情	3(3.66)	16(19.51)	31(37.80)	23(28.05)	9(10.98)	0(0)	82(100)
⑧イメージ	3(3.66)	12(14.63)	36(43.90)	24(29.27)	7(8.54)	0(0)	82(100)

表10 子どもの歌を歌唱する上で大切にしていること(複数回答可) N=16

	記述内容
イ	歌詞を間違えないように歌う
ロ	喉に開けるよう、口の開け方について留意している(2)
ハ	口を大きく開けるようにしている(2)
ニ	自分自身が楽しむことで相手に伝わる
ホ	歌う時の目線に気を付けている
ヘ	鍵盤や楽譜から目を通して顔を見て歌えるように意識している(4)
ト	伴奏の音をよく聞いて歌うようにしている
チ	①～⑧の項目が全て1番大切と思つて歌唱する
リ	良い、始めの言葉はしっかりと意識して歌いだす
ス	前に子どもの姿があることを意識して歌う
ル	子どもが歌いやすい速度を意識して歌う

設問3についての回答数は16名より記述回答があった。記述内容について、なるべく学生の記述をそのまま掲載するようにしたが、筆者の判断で、内容が同じ、または記述の意図が類似

する場合は、同意見とみなして集約した。その内容を表10に示す。

5. 考察

以上のように、学生の子どもの歌に関する図1のアセスメントシートの結果から、子どもの歌を歌唱する際の注目点や、重要と位置付けている内容について分析を行い、学生自身の自己評価の視座と照らし合わせながら、子どもの歌に関わる歌唱についての気付きや課題を検討する。

（1）設問1と設問2の結果から

学生が、子どもの歌を歌唱する際に、大切と思っていることに記入した学生の最も回答の多かった項目（表5）は、④声の音量と、⑦表情の同数80名（97.56%）であり、殆どの学生が、大切と考えている結果であった。その中でも、④の声の音量については、表4からも分かるように、最も大切なことと捉えている。学生の理由には、子どもの指導に関連付けた内容が多い。まずは、指導者として、子どもに声を届けるという役目と、歌を歌うことは楽しいことであるということ、表情を通じて、伝えると考えているようである。そして、子どもが、歌を歌う際の声量についても、大きな声で歌うことを求め、その手本となるために、自身も大きな声で歌うと考えている。また、元気よく歌うことと、大きな声で歌うことを、同じ意味と捉えていることが分かった。元気よく歌うことの認識は、躍動的なリズム感や、表情、歌を歌う時のイメージ、元気な気持ちを表現しようと試みることが大切と、筆者は考える。元気な気持ちを表現しようと、全身を使って歌唱したならば、当然、声量も上がるだろう。表6の理由には、声の音量について、ただ大きいのではなく、声を調整できることが大切と考えている学生が3名いた。これこそ、豊かな表現に繋がる記述であると考えられる。また、④についてのスキルの自己評価について、約4割の学生が、苦手と答えている。大きな声が出せないとの悩みである。声の伝導は空気振動である。歌声は出すのではなく、届けるものと筆者は考える。いかにして、効率よく声を届けるのか、その指導に繋がる研究を行う必要があるといえる。声帯に負担をかけて、大きな声を出して歌唱するならば、忽ち、声帯は傷付いてしまい、音声障害を引き起こす危険性が大きいといえよう。元気＝大きな声との考えは、危険性が含まれていると考えるので、指導に当たっては、その指導法を研究する意義は、大きいといえよう。

表情について、楽しい表情で歌唱することが大切であり、実際に、心掛けていると回答した学生が多かった。保育者は、子どもの身近な環境ということ、認識している結果といえよう。実際、子どもの歌には、明るく、楽しい楽曲が多い。そのような理由から、このように回答したのではないかと推察する。明るい表情は、どんな時でも、大切な要素である。明るい表情を保つことで、顔の表情筋群が作用し、豊かな表情を作り出す。筋肉で構成されているので、使用しないと表情は乏しくなっていく。年齢と共に衰えていくことを考慮すると、日頃から、活発に表情筋を動かすことが大切といえよう。また、表情筋はマ行、ワ行、バ行、パ行の発音をする際にも、大切な役目があるのである。

3番目は②リズム71名（86.59%）、4番目は①音程67名（81.71%）であった。前記したように、リズムは躍動感や生命感を表現することができる。一定のリズムは、身体に感覚として残り、リズム感を養う。表6の理由にも、〈リズムを感じて歌うことの楽しさ〉、また、〈歌いやすさ〉、

〈リズムを合せる一体感〉との表記があり、リズムの大切さを理解している内容といえよう。リズムを感じることで、音楽表現から身体表現に繋がると記述している学生がいた。領域「表現」における教科間の関連性について理解しているものと推察する。

基村（2018）は、子どもの絶対音感の獲得は7歳あたりであると述べている⁸⁾。そのことを考慮すると、保育者は、子どもの歌を歌唱する際に、正しい音程で歌う必要性があるといえる。学生の理由の記述にも、子どもに指導する立場として、正しい音程での歌唱の大切さを述べている学生が多かった。また、聴覚への影響や、異なった音程で歌唱する際に生じる違和感についても、記述している学生がいた。S.Koelsch（2017）は自書の中で、「ピッチ知覚は音楽知覚の基礎であり、そのピッチは筒状の中をらせん状に知覚する。」と述べている⁹⁾。例を挙げるとするならば、一点ハ音と二点ハ音の2つのピッチは、筒状のらせんが1回転の状態であり、物理的に1オクターブ離れているにもかかわらず、同一の音として知覚される。しかし、一点ハ音と一点ロ音とは、一点ハ音と二点ハ音の距離に比べ、半音分だけしか違わないにもかかわらず、全く違った音として知覚されというのである。学生に備わった音感と誤差のズレが、感覚的違和感を生む所以であろう。学生の記述にも、音程が合っていると綺麗に聴こえる、正しい音程を教えて歌った方が楽しい、正しくないと子どもが歌えない、合っていないとリズムにのれない、音程が合っていないのは聞きたくないと思う等、ピッチの違和感から、歌唱意欲の喪失に繋がる記述があった。正しい音程で歌えるようにするには、聴くことが大切となる。他者の声を聴く、また、歌唱と一緒に奏でられるピアノ等の音を聴き、自分の声の音程と合わせるという意識を持つことが大切といえる。また、声は、声帯に伴う筋肉運動によって音程が作られる。授業では、子どもの歌の音域に合わせた発声練習の必要といえる。ピアノ技術の習得には、運指練習が継続して必要のように、発声の音階練習も、自習学習が行えるような、メソッドの開発研究を行う必要性が見つかったといえよう。

5番目が、⑧イメージ58名（70.73%）、6番目が、③言葉・発音57名（69.51%）とあり、これらを大切と記入した学生は、全体のほぼ70%という結果であった。イメージについて大切と回答しているが、図2のグラフからもわかるように、学生の順位の中で高得点を挙げているわけではない。表9の学生のスキルの自覚評価からも、3どちらでもない、4ややできる、という回答が大半を占めている。表6の記述には、子どもの歌を歌唱する技術の向上に繋がるだけではなく、音楽の楽しさ、自己の思いや、それを表現する喜び、そして、豊かな感性を持ち合わせることに繋がることが記述されている。領域「表現」のねらいがここにあるといえよう。また、言葉・発音については、子どもの領域「言葉」の発達に深く関連することを意識している学生が、多かった。表8からも明らかのように、そのスキルは持ち合わせていると考えている学生が、多いことも分かった。前記3（2）でも記述したように、母国語である日本語は、意識せずに話することができる。故に、子どもの歌を歌唱する際も、言葉や発音に留意することは難しいといえよう。ピアノ初心者がピアノを演奏する場合、一つ一つの音と運指を確認しながら、丁寧に練習を行う。しかし、歌唱する際は、音程には留意しても、言葉の発音にも、注意が払える学生は少ないのではないだろうか。歌唱の極意は、言葉を表現することと筆者は考える。言葉に思いを芽吹かせ、呼吸に合わせたフレーズ感で、旋律を届けるのである。学生が、言葉に広がる世界観や思いを届けられるよう、言葉に対する感覚が磨かれるように、授業で実施して行きたい。

7番目が少し離れて、⑥姿勢55名（67.07%）であった。3人に2名という割合になる。姿勢の重要性について、表6の記述には、歌唱技術の発声法に繋がる事例が多かった。姿勢を保

つことの重要性を、学生が認識しているといえよう。声は、姿勢に留意して、身体全体を支えることで、柔らかく、しかも、芯のある声を、遠くに届けることができる。弓矢を引き、的に中てることをイメージする感覚と近いともいえよう。片手だけでは、矢は飛ばない。下半身を安定させ、左手で弓を持ち、右手で矢を引き、身体の左右のバランスを取りながら呼吸を安定させて、矢を放つのである。矢は放物線を描きながら的に当たる。声も自分の発する声のイメージを持つことで、声の方向性が定まるのである。この安定した状態を作ることが、姿勢に繋がると筆者は考える。この時、歌唱するのに、力みは不要である。記述には、正しい姿勢でとの表記があった。この正しい姿勢を把握できるように、学生が、身体の細部に至るところまで、感覚として持てるような方法について、研究を進める課題が見つかった。

以上は、学生が、比較的、大切にしている項目と判断して良い範囲ではないだろうか。それに対し、最も関心の薄い結果であったのが、⑤美しい声34名（41.46%）であった。約6割の学生が、無記入と関心が薄く、認識があった学生4割にしても、その順位は、最下位に位置している。このことから、声の美しさについて、認識が、殆ど無いに等しいといえる。要領・指針の領域「表現」のねらいには「いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。」と明記されていることから、学生においても、自身の歌声に対する、美的感性が必要といえよう。何より保育者の声は、園生活の中で、常に、子どもの音環境として、あらゆる場面に存在するのである。音感に敏感な子どもに対し、美的感覚が伝わるように、是非、なってもらいたい。人の声は美しいのである。そのことに気付くことで、その美しさは、更に磨きをかけることが可能であろう。子どもの歌を園で取り上げる際、ピアノ伴奏を回避するためや、弾き歌いのスキルの問題等から、CD等の音源を使用する園を耳にする。確かに、それらは、伴奏がオーケストラ・バージョンであったり、リズム楽器やシンセサイザーの多種によるアレンジであったりと、聴き映えのする楽曲に仕上がっているものが多い。時々、使用しても良いが、やはり保育者の肉声で、保育者の息遣いが伝わるように、歌唱してもらいたいものである。子どもにとって、身近な人の肉声の方が、より美しいと感じるのではないかと思うからである。

就職して間もない新任の保育者は、子どもの指導に伴い、声を壊してしまう者もいる。これを回避するためにも、学生には、自分の発する声について無頓着にならず、容姿と同様に、声にも興味を持ってもらいたいと願う。以上のことから、学生自身が声に気付き、その美しさについて、自負できるように指導を行っていかねばならないことが、わかった。この研究を通して最も重要な課題の一つということがいえよう。

（2）設問3の結果から

記述数は16と少なかったが（表10）、その内容は、将来を見据えた意識の高い内容であった。それぞれについて、考察を行う。

イの歌詞を間違えないようにというのは、歌詞を覚えて歌うという意味ではないだろうか。学生の前向きな心がけと捉えたい。口の口を縦に開けるとは、欠伸をする際の口の開け方が参考となる。口を開けるとは、上顎から下顎を垂らすような感じで開けることで、口腔内の広がり確保することができる。普段の会話においても、口の開け方を意識することで、声の響き確保することができ、音量も、少ない力で遠くまで声を響かせることができるのである。ハの口を大きく開けるようにしているとの記述について、具体的な開け方は、記載されていなかった。一般的に〈口を大きく開けてみましょう！〉と声掛けをすると、下顎は、硬いまの状態なので、口は横に広がっても、口腔内の空間の確保は、されない。また、口の周りの筋肉に力

が入ってしまうため、声帯に無理な力が入り、声帯を痛めてしまう可能性が生じる。ゆえに、口を縦に大きく開けるという意味になるよう、授業を通じて伝えていきたい。二は、学生が実際に経験したことではないだろうか。真に思うことが、相手の心を打つのである。歌の楽しさを共有し合えることに繋がるといえよう。ホの目線については、具体的な記述はなかった。下を向いたままでは、まず、脛が下がる。それと同時に、頬の筋肉も下ることから、鼻腔に繋がる口蓋の筋肉が緩んでしまう。これにより、声の響きが頭骨内で籠ってしまう可能性が生じる。しかし、声は内耳を伝えているので、自分にはとてもよく聴こえるのである。目線が下がらないように、気を付けて歌唱しているのならば、大変良いことと思う。他の学生にも、目線について喚起を行っていきたい。へは、子どもたちの前で弾き歌い演奏を想定した回答である。オリエンテーション時の回答であるので、弾き歌いのスキルについて、まだ、指導を行っていない。将来の姿を想像して、弾き歌いの目的を積極的に捉え、主体的で、深い学びに向けた意気込みが感じられる記述といえよう。トは、歌唱しながら、外耳から入る音を積極的に聴こうとする試みを、述べている。ホで説明したように、歌唱する際、自分の声は、内耳を通して聴こえる。この学生は、あえて、外耳からの音にも注意を払おうとしていると推察する。チは、オリエンテーションの際、①から⑧まで内容の説明を行ったことを鑑み、それぞれの項目について、相互に作用していることを理解したと推察する。リは、歌唱をする際の最初の息の出し方と、語頭の言葉との関連性を感じているのではないかと推察する。実際、語頭の発音を十分に準備し、はっきりと歌いだすことで、息のフレーズを保って歌唱することができるのである。授業を通じて、他の学生にも伝えていきたいことの一つである。ヌも、へと同様、子どもの姿を想像して歌唱すると回答した内容であった。歌唱の際、誰かという対象を設定することで、思いを伝えようとすることに作用する。歌を通じて、子どもと思いを伝え合い、一緒に共有して楽しむことができたならば、素敵な保育者になれるであろう。ルは、子どもと一緒に、歌を共有して楽しむことに重点をおいていると、推察する。幼児の呼吸は、身体的発達の成長過程のため、未熟な部分もあり、長いフレーズを歌唱するのは難しい。少しでも長いフレーズを歌うには、吸気を行うタイミングが大切な鍵となる。子どもの身体的特徴を理解した上で、このような思考ができるのは良いことと考える。

尚、ここで取り上げた身体と響きに関わる関連についての意見は、筆者の長年の発声法の研究における実体験により、裏打ちされたものである。

6. おわりに

この研究を通して、子どもの歌の歌唱についての授業改善や、授業展開のための問題、また、課題が明らかになった。そして、子どもの学生の歌の歌唱について、学生の視点からは、将来の保育者としての像を見据えて、学習にあたっていることがわかった。このことは、ディプロマポリシーにおける、学修の目的意識に関連し、意識が高いといえる。しかし、それが到達目標に、直接的に繋がるかという疑問である。何故ならば、アセスメントシートの評価について、補足がなかったり、説明が不十分であったために、学生自身の評価の基準が一定でなかった。また、評価の振り返りを、途中や最終授業でも実施すべきであったことが、反省すべき点であるといえる。

今後も、この研究を行い、授業改善を行うことで、学生指導に役立てていきたい。

脚 注

- 1) 伊澤修二が文部省に宛てた書簡「学校唱歌ニ用フヘキ音楽取調ノ事業ニ着手スヘキ在米目賀田種太郎、伊澤修二ノ見込書」(1878.4)。村松直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ』、p40
- 2) 小島エマ『実践保育内容シリーズ音楽表現』第5章歌う表現活動の展開例、p53-62
- 3) 高御堂愛子『幼稚園教諭・保育士をめざす楽しい音楽表現』圭文社、p52
- 4) 小川容子・嶋田由美（2013）
- 5) 長井晴海（2008）
- 6) 基村昌代（2018）
- 7) 河合玲子（2015、2016、2017）
- 8) 前掲6）
- 9) Stefan Koelsch（2017）

引用・参考文献

- 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館（2018）
厚生労働省編『保育所保育指針解説』フレーベル館（2018）
内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館（2018）
村松直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ』和泉書院（2011）
高御堂愛子監修『幼稚園教諭・保育士をめざす楽しい音楽表現』圭文社（2013）
金田一春彦『童謡・唱歌の世界』講談社学術文庫（2015）
三森桂子・小島エマ『実践保育内容シリーズ音楽表現』一藝社（2016）
小川容子・嶋田由美「印象評価と音響特性から探る保育者の歌声（Ⅰ）」岡山大学大学院教育学研究科研究収録第152号 p35-43（2013）
長井晴海「子どもの歌のうたい方について－幼児教育養成校における保育内容の実践研究－」県立新潟女子短期大学紀要研究第45号 p111-116（2008）
基村昌代「幼児音楽活動における指導の一考察－音楽劇創作の歌唱表現に焦点をあてて－」桜花学園大学保育学部研究紀要第17号 p111-124（2018）
河合玲子「日本語唱法の研究－鼻濁音Ⅰ－」名古屋女子大学紀要第61号人文社会編 p297-310、(2015)「日本語唱法の研究－鼻濁音Ⅱ－」名古屋女子大学紀要第62号人文社会編、p61-272（2016）幼児教育・保育における〈こどものうた〉の歌唱技術の習得に効果的な指導法の一考察 p99-311（2017）
小林美実『いろいろな伴奏で弾ける選曲 こどものうた100』チャイルド社（2014）
David Blair McClosky高山教子訳『美しい発声法』音楽之友社（1978）
Stefan Koelsch 佐藤正之訳『音楽と脳科学』北大路書房、p22（2017）